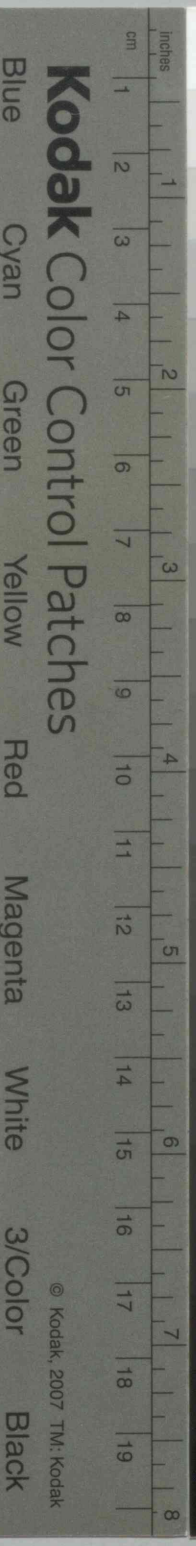
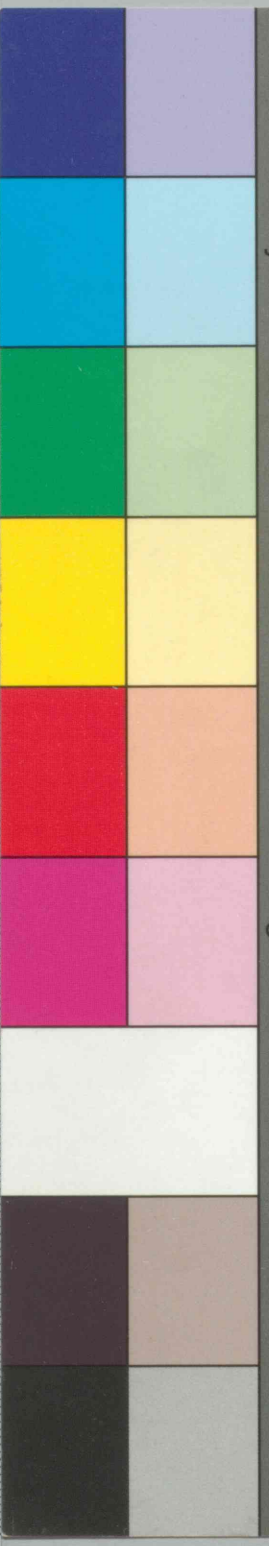


3a
810
冊24

著作教科書

国語

第五学年下



60390
教科書文庫
6
810
74-1950
20000
67144



資料室

国

語

第五学年

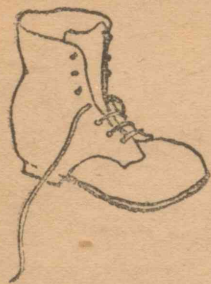
下



3a

810

AB 25



十一	ある写真帳	九十六
十	ことばのはたらき	八十七
九	テニス	七十七
八	雪まろげ	七十
七	みえない力	六十四
六	伝説	五十五
五	人形しばい	四十三



一	小さなおこない	四
二	写生	十三
三	わたしの民ちゃん	二十三
四	光を求めて	三十一

もくろく



一 小さなおこない

コロンプスのたまご

コロンプスがアメリカを発見して帰ったとき、イスパニア人はたいへん喜びました。

ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンプスの成功を祝しますと、ひとり
の男が、

「大洋を西へ西へと航海して陸

地にであつたのが、それほどの手がらだらうか。」

と、いってあざわらいました。

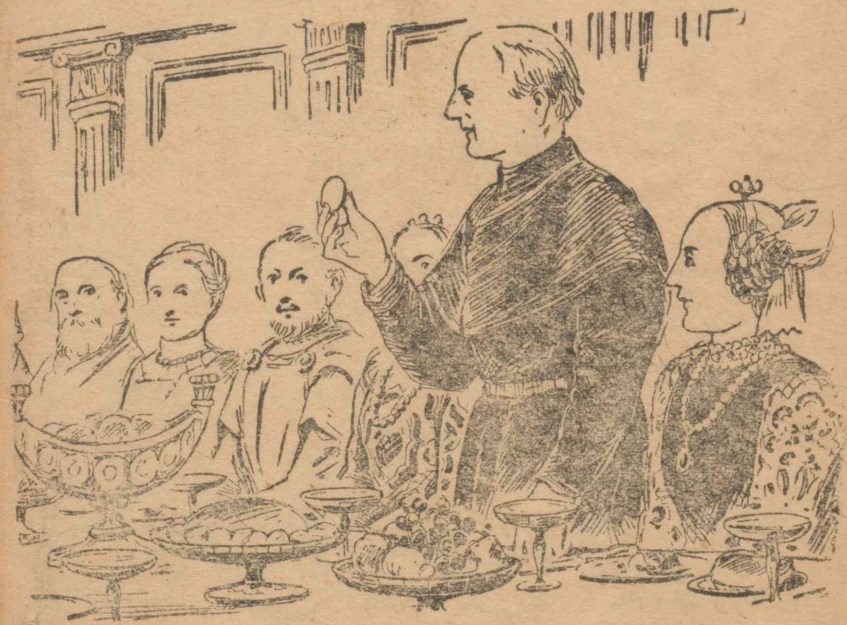
これをきいたコロンプスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、

「みなさん、こころみにこのたまごをテーブルの上に立ててごらんなさい。」

と、いいました。

人々は、なんのためにこんなことをいいたのかと思ひながらやってみましたが、もとより立とうはずがありません。このときコロンプスは、コツンとたまごのはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てていきました。

「みなさん、これも人のしたあとでは、なんのぞうきもないこ



とでございましょう。」

やまぶきのひとえだ

ある日、太田道灌は、たかが
りにでかけました。すると、に
わか雨がふりだしたので、近く
の家をたずねて雨具をかりるこ
とにしました。

「もしもし。」

こういって戸をたたきますと、
おくからひとりの少女がでてき
ましたので、



「雨でこまっております。雨具をかりたいのですが。」

とたのみました。少女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさい
ていた黄色なやまぶきのひとえだをおってきて、それをしずか
にさしだしました。

道灌は、その花のえだを手にはしましたが、なんのことだかそ
の意味がわかりません。少女とやまぶきの花とをみくらべるば
かりでした。

それからのちになって、道灌は少女の心がわかりました。

それは、

「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲し

き」

という古歌に、少女の思いをたくしたものでありました。

はた織り

孟子がまだ子どものころでした。

家をはなれて勉強にでかけていましたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、会いたくなかったので、学校から家へもどってきました。

「おかあさん。」

と行って、母のそばへかけよりました。そのとき、母ははたを織っていました。孟子の顔をみると、つと立って、そばにあつた小がたなをとりあげました。

孟子がびっくりしていると、母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切ってしまったました。

孟子はおどろいて、

「おかあさん、どうなされたのですか。」

とたずねますと、母は、

「おまえが学問のちゅうとでうちに帰ってくるのは、ちゅうと、織物をちゅうとでたち切るのと同じことです。」
といました。



ガラスのかけら

ある町角の広場で、ひとりのみすぼらしい身なりをした老人

が、道路をうろろとみまわしながら、なにかさがしては、それをひろってポケットに入れていました。

そのようすをみていたじゆんさが、老人のそばによつてきて、

「なにをひろっているのですか。」

とたずねました。

すると、老人は、ほおえみながらポケットに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、ガラスのかけらばかりでした。

じゆんさは、

「こんなものをひろって、どうするのですか。」

とききました。すると、老人は、広場の方を指さして、

「あの広場で遊んでいる子どもたちをごらんさい。くつをはいている子どもはひとりもいません。もしけがでもしてはかわいそうですからね。」

と答えました。

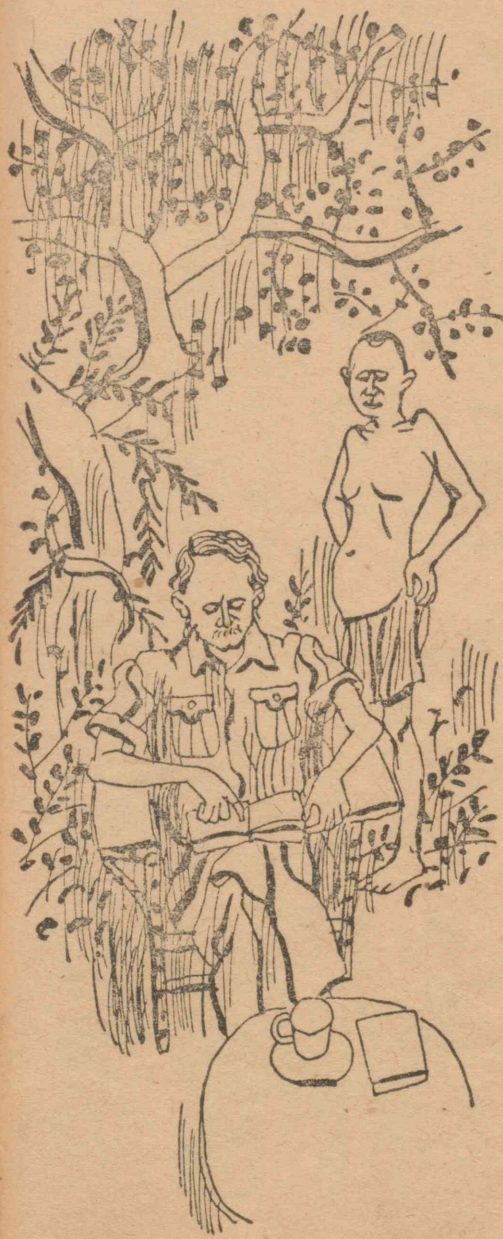
この老人は、ペスタロッチという人でした。

書物

リビンクストーンが南アフリカをたんけんしていたときの話です。ある日、リビンクストーンが木かけて書物を読んでいました。それをみた土人のひとりが、書物というものはなにかすばらし



い力をもっているものだと考えました。
 そこで、リビングストーンがちょっとそとにでかけたるすにやっ
 てきて、その書物を手に取りました。
 そうして、ページをはぎとって、たべてしまったということ
 です。



二 写生

(一)

文雄は、庭のかたすみにかを立て、木のかぶにこしかけて
 写生をはじめた。

そこには一本のぎくろの木
 があつて、夏じゆう美しい花
 をつけていたが、あらかたちっ
 て、あとにいくつかの実がなっ
 ていた。それが、めきめきと
 大きくなり、このごろは、き



わだつて美しいつやつやしたしゆの色がさしてきた。文雄は、
それがかきたかった。

高いところからたれさがったのもいい。まだ青々とした木の
葉の中から大きくのぞいているのもいい。だが、根もとのとこ
ろに三つ四つかたまっていたらいい。

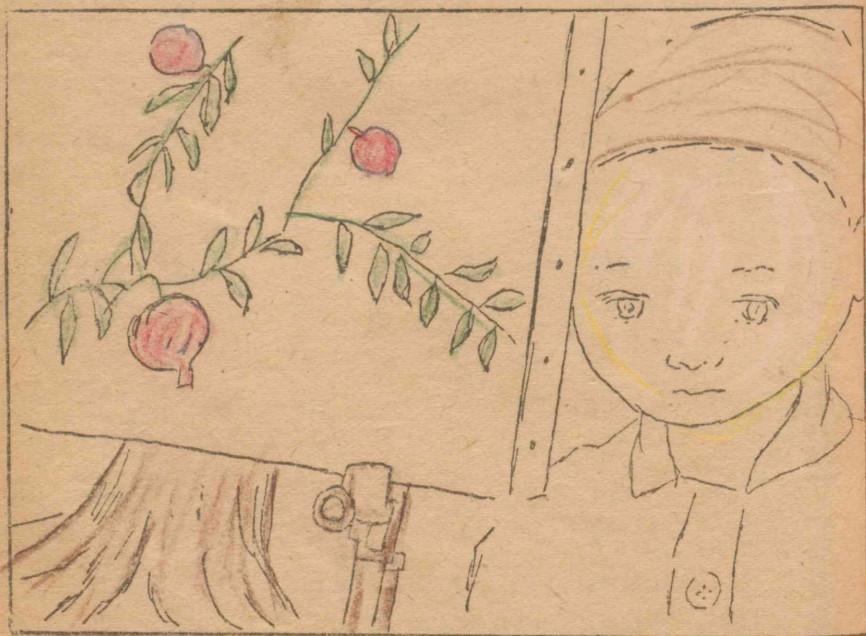
文雄は、あれこれと考えていたが、根もとをかこうと決心し
た。そうして、いよいよ下がきをかきはじめた。しかし、その
根もとの地面には、夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいた
かれ草が、すっかりくちていた。文雄はそれが気になってしか
たがなかった。

「これをとりかたづけてやろうか。」
ひとりごとをいながら文雄が、そのくちた草をとりのけよ

うとすると、大きなえんまこ
おろぎが一びき頭をだしてい
た。そうして、文雄が手をの
ばすと、すばやくあなの中へ
かくれてしまった。

「これは、こおろぎのすなん
だな。そのままにしておい
てやろう。」

文雄は、それをとりのける
のをやめて、また下がきにか
かった。だいたいの形をしっ
かりとつかんで、日のある



ところ、かげになったところ、力のこもった角、まるみのある面、重みのかかったえだのつけね、ふわふわした軽い葉、そんなところをはつきりつかまえたいものだと思って、しきりに木炭を動かしていた。

下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。これは、絵のすきだったおじさんからゆずってもらったもので、子どもにはりっぱすぎるほどだった。いい色の絵のぐがたくさんあった。しかし、パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、カンバスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまふ。

かきなおし、ぬりなおしして、かいていくうちに、ひととおりできあがった。文雄は立ちあがってすこしはなれたところからじっとみつめた。

「だめだ。すこしも立体感がない。あのぎくろの色もかけてないや。」

文雄は、木のかぶにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

(三)

「もしもし。ぎくろさん、ぎくろさん。たいへんいい色になりましたね。」

「ああ、こおろぎさんですか。まだだめです。もっともっと美しくなりたいと思っっているのですが——あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。はじめ短いはねを動かして

ピツピツと鳴いていたときには、ほんとうにおかしいように
したけれど——」

「ぼくにはだれも教えてくれるものが
ありません。せんだって、ふとはねを
動かしてみたら、ピツピツという音
がしました。ははあ、これが鳴るん
だなど思ってたやうに、だ
んだんおもしろくなったのです。お
となりの草むらでも、遠くの草むら
でも、ピツピツという音がする。み
んな自分たちのなかまだなと思つてよくきいてみると、じよ
うずなのもあるし、へたなのもある。毎ばん鳴っているうち
に、すこしずつじようずになっていくようです。」



「近ごろはたいへんじようずになりました。このあいだのばん
も、ピアノの先生が、散歩にいらちして、あなたの鳴く声に
耳をかたむけて、たいへん感心していましたよ。」

「いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがって
おいでだろうと思ひました——あなただつてその実をそんな
に美しくなさるには、ご苦心が^ごおありだつたでしょうね。」
「そこへいくと、こおろぎさんよりよほどいいのです。わたし
はなん年もなん年も生きていますからね。一年一年とすんだ
ことをかえりみて、来年はもっともつとよくしたいと考える
ことができます。」
「ですから、はじめて実をつけた二三年は、青い小さな実が、

ほんの二つ三つ、ついたりつかなくなったりだったのに、このごろでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。

「やっぱり容易じゃないのですね。」

「この実のかげは黄色くぼけているでしょう。わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。けれども、思うようにいきません。」

「ほら、そこで絵をかいている文雄さんがいってましたよ。どうしてこのぎくろはこんなに美しいんだらうって。」

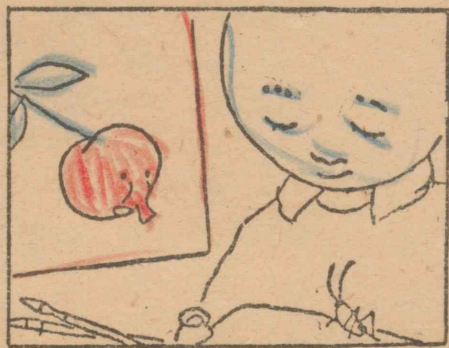
「そうですね。わたしはまた、あのような絵のぐがあればいいなど思いましたよ。あれがあれば、どんなかげのところでも、美しい色にできますがねえ。」

「絵をかくことも、いっしょうけんめいにけいこしなくちゃだめでしょうね。」

「そうですね。文雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、美しいりっぱな実をたくさんつけるようになりたいものです。」

「ぎくろさんが、来年とか、さ来年とか、それからもつとさきのことをおっしゃったりすると、なんとなくさびしくなります。」

「ごめんなさい、こおろぎさん。でも、あなたの歌には、そのさびしい気持がでているので、人の心を動かすのだって、あのピアノの先生がおっしゃいましたよ。」



(三)

「自分には父もある、母もある。まだわかい。先生もあるし、友だちもある。どんな絵の大家だって、一心にけいこをして、じょうずになったのだろう。

そうだ、けいこだ。高い理想をめざして、いっしょうけんめいけいこをすることだ。」

文雄はこう考えた。



三 わたしの民ちゃん

長いこと外地にいた姉たちがひきあげてきました。せまい家なので、義理の兄は気のどくだといって、いつもえんりよがちにしています。母をはじめ、うちの人たちは大喜びです。ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、家内じゅうが歓声をあげているといつても、いっすぎではありません。

やしきがすこし広いし、父がまえからそういふときのことを考えて、近所のあれ地を三アールばかりかいかんして、きつまいもや野菜を作ったりしていたので、さしあたりこまることは

ありません。

ふたりのまごどいいうのは、父母にとつてのことですが、わたしには、かわいいめいとおいにあたります。

おいの正男^{まさお}ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、めいの民ちゃんは、二つ、満でいえば一年三か月で、まだ歩けません。発育がたいへんおくれっていて、かわいいそうです。わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼるほどうれしかったのです。

民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいものです。民ちゃんは、まだ、うんこもしっこもいえません。早く、いえるようにしてやりたいものです。民ちゃんは、ぼつぼつものをはかっています。ちよつときいてもわかりません。姉^{あね}

だけにわかるへんなことばをいっています。わたしも早くそれを覚えたいと思います。

学校から帰つてくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受^うけます。姉が、いそがしいので、おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんは平気でそこらをはいまわっています。わたしは時間をはかつては、そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていって、用をたさせるようにしました。

はじめはいやがっていた民ちゃんも、よごれていないほうが気持がいいので、ときどき、わからないことばで、わたしに知らせるようになりました。

「ねえさん、たいへんな進歩ですよ。いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます。」

「ありがとう。いそがしいものだから、ついしつけができなくて。」

民ちゃんは、つくえ

とか、テーブルとか、なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、そのまわりをぐるぐると歩きます。ちゃぶ台をだして、食事の用意などをしていると、



とりついてぐんぐんおしていった、かべぎわにおしつけてしまったりします。けれども、かんじんの歩くことはまだできま

せん。たった九十センチぐらいのところでも、こっちからあっちへいくとなると、すぐに手をついて、いざり歩きになります。かた足をなげだして、おしりでいざつて歩くのです。

たいへんおそいようですが、いざりだすとなかなか早いものです。いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいっているというように、すこしもゆだんができません。

立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいったことを思い出しました。それで、わたしはおべんとうの包みをこしらえて、

「民ちゃん、これ持って学校へいきましたようね。」

と行って、民ちゃんに持たせてみました。

「ガッコ、ガッコ。」


~~~~~

民ちゃんはうれしそうに  
いって、その包みをと  
りあげると、よちよちと  
立ちあがりました。

「ばんざい、ばんざい。  
さあ、いっちょにいき  
まちょうね。」

たもとをひいてやると、  
民ちゃんは、ぱったりそ  
こへすわりこんでしま  
いました。

「だめねえ。さあ立った

して。」

立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二足ほど歩きました。

こんなふうにして、毎朝おべんとうをこしらえて持たせてい  
るうちに、民ちゃんは三足四足と歩けるようになりました。

ある日、学校から帰ってくると、姉が大きわぎしていました。  
「ゆだんができないわ。いま、民ちゃんがひとりでおかって口  
から地面におりて、わたしのげたをひっかけて、正男のあと  
を追っかけて道まででていたのよ。」

「まあ、そう。でも、いっそんなことを覚えたんでしよう。た  
いへんな進歩じゃないの。」

わたしはそういいながら、このごろふとってきて愛らしくなっ  
た民ちゃんをだいてやろうとすると、かぶりをふって、





「オソト、ワンワン、チロイ。」  
というのでした。

おとなりで、このご  
ろ白いいぬをかうよう  
になりましたが、民ちゃ  
んは、そのことをいう  
のでしよう。

「チロイ、ワンワン、

チツポ

ワンワン、ゲタ ナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。」

民ちゃんのことば数のふえるのには、おどろいてしまいまし  
た。



#### 四 光を求めて

(一)

私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな  
日は、サリバン先生がきてくださった日であります。それは一  
八八七年の三月三日、私が満七さいになる三か月まえのことで  
ありました。

この日の午後、私はなんとなくものを待つ気持で、じっとげ  
んかんにたたずんでいました。午後の日光は、げんかんをおおっ  
たすいかずらのしげみをもれて、みあげる私の顔にふりそそい  
でいました。もう、めばえそめたそのなつかしい葉や、花の上



を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。私は、  
どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこしも  
知りませんでした。

私は、近づいてくる足音  
を感じましたので、それが  
母だとばかり思いこんで、  
両手をさしだしました。だ  
れかがそれをとらえました。  
そうして、次のしゅん間は  
は、私は、先生——私の心  
の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、いいえ、そ  
れよりもなによりも、私を愛するためにもてくださった——そ

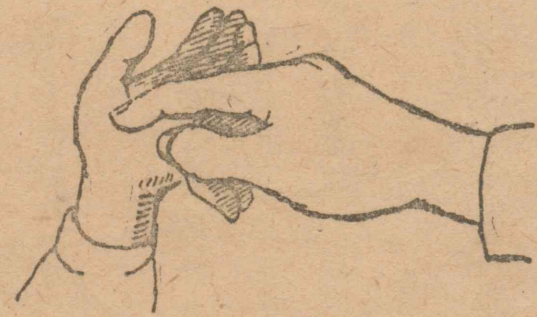


のかたの両うでの中に強くだきあげられました。

サリバン先生は、お着きになったあくる朝、私をおへやによ  
んで、一つの人形をくださいました。私がしばらくその人形と  
遊んでいますと、先生は、私の手に、

「人形」という文字をつづられました。

私は、すぐこの指の遊びがおもしろく  
なって、それをまねようと思いました。  
どうとうじょうずにつづれましたとき、  
私は子どもらしい喜びと得意さに大は  
しゃぎで、二階から母のところへかけ  
おり、指さきで人形という字をつづってみせました。  
そのとき、私は、もちろん、ことばをつかっていることや、





そんなものがこの世にあることさえ知らず、ただ、さるの人まねのように指を動かすだけでした。

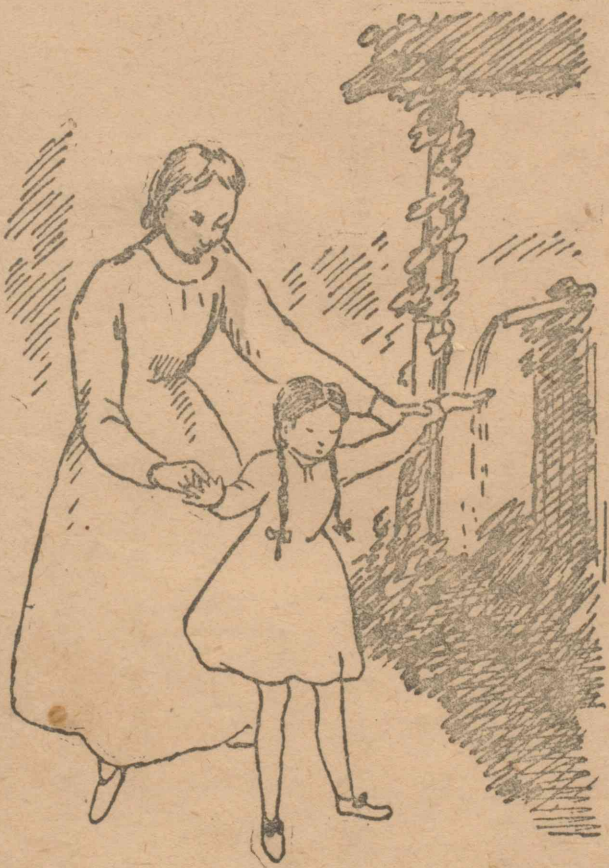
それからいく日かのあいだに、なんのこともわからないうちに、私は、「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんのことばをつづることを覚え、「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、先生がおいてになってからいく週間もたつてからのことでした。

ある日、私が新しい人形を持って遊んでいますと、サリバン先生が、ほかの大きな人形を私のひざの上において、「人形」という字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

その日はすでに、私は、「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとでした。サリバン先生は、「ゆのみ」が道具で、「水」がその中にはいつているものであることを、はつきり教えるために苦しめられたのですが、私は、いつまでたつても区別ができませんでした。先生は失望して、一時やめていらっしやいましたが、こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。私は、どうにかんしゃくをおこして、新しい人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。そうして私は、くだけた人形のかけらを足さきを感じながら、ゆかに思いました。私は、先生がかけらをいろりのかたすみにはきよせておいて、なっているようすを感じましたが、ただ、はらだちの原因がどりのぞかれたという満足を感じたばかりでした。



しばらくして、先生がぼうしを持ってきてくださったので、私はあたたかい日なたにでるのだと知って、おどりがりました。ふたりは、いどの小屋をおおっているすいかずらのあまいにおいにひかれて、庭の小道をおりていきました。だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといの口の下へやりました。冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、別の



手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。私は、身動きもせず、立ったままで、全身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

ところがとつぜん、私は、なにかしらわすれていたものを思い出すような、めばえてこようとする心のはたらきといったようなあるふしぎなものを感しました。このときはじめて、「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいもの名で、あることを知りました。

この生きた一ことが、私のたましいを目ざめさせ、光と希望と喜びとをあたえることになったのです。

こうして私は、物にはみな名まえのあることがわかったのです。私の手にふれるあらゆるものが、生命をもって動いている



ように感じはじめました。

それは、先生があたえてくださった新しい目で、すべてをみるようになったからです。

へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわした人形のことを思いだして、いろいろのかたすみに走りよってかけらをひろいあげ、それをつぎあわせようと思いました。がだめでした。

私の目にはなみだがいっぱいたまりました。自分のしたことがわかったので、生まれてはじめて、くやむ心と悲しみとにむねをさされました。

私はその日、たくさんのことばを覚えました。全部覚えては  
いませんが、その中には、「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあっ  
たことを思い出します。

できごとの多かったこの日もくれて、小さなベッドに横たわ  
りながら、この日が自分にもたらした喜びを思い返していたと  
きの私ほど幸福な子どもを発見することは、むずかしいでしよ  
う。私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日を待つこと  
を知りました。

(二)

これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の人を書いた「わ  
が生がい」の一せつを、日本語になおしたものです。

よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぼ  
でした。それなのに、こんなにっばな文章が書けるといふこと  
は、なんとすばらしいことではありませんか。



ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、気持があらあらしくなり、かんしゃくもちになったのもわりはありません。

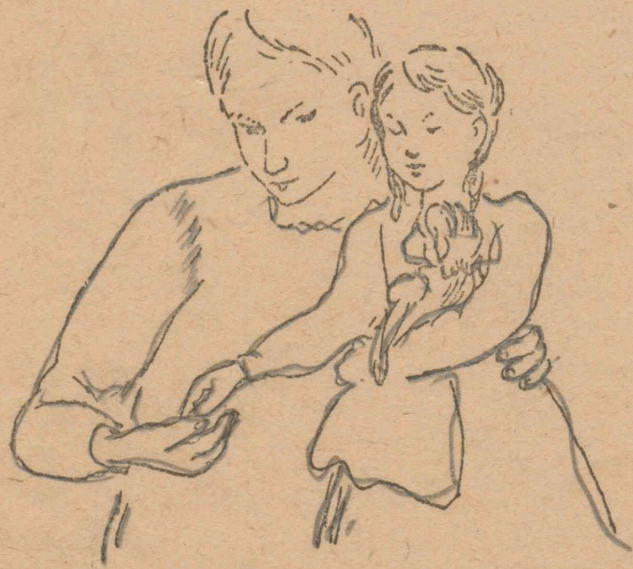
ケラーの両親は、なんとかがして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、もうあ教育に経験のあるサリバン先生にきていただくことにしました。

サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくには、なみなみならぬどりよくがいました。しかし、ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、そのまっ暗なきびしい心を明かるくすることに成功しました。だんだんちえがつき、もの心がついて、学校に行くようにな

りました。もちろん、サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひどりのようになって、勉強をはじめたのです。手のひらに文字を書くことから、進んで、手と手をにぎりあい、そのにぎりかたによって「ことば」をとりかわすようになりました。

ケラーは、もうサリバン先生なしには、生きていけません。先生も、

「私が命がけてせわをすれば、ケラーさんがすくわれるのです。





どうぞ神さま、おまもりください。」

といのりながら、一生をケラーのためにささげました。

そののち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。これは、ケラーのサリバン先生に対する偉らいと、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになつたおかげです。



## 五 人形しばい

### 動きの世界

「ふしぎだなあ。」

「なにが。」

「ねえ、おじさん。どこのまの人形が、動きだしそうな気がするんだけど——」

「そうだね。おどりだしそうにみえるね。」

「いつかおじさんからいただいた童話の本に、人形が夜中に集まっておどりだす話がありましたよ。」

「この人形だって、みんながねしずまったあとで、動いている



のかもしれないよ。」

「ほんとう、おじさん。」

「さあ、人形にきいてごらん。はははは——でも、動く人形だ」  
てあるよ。一雄くんは、人形しばいをみたことがあるかね。」

「人形しばいって、人形がしばいをするんですか。」

「そうだ。もちろん人が動かすんだがね。日本には、文楽といっ  
て、りっぱな人形しばいがある。その人形などは、長さにす  
れば一メートル以上のものもあるが、まるでたましいがはいっ  
ているように動くよ。」

「へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。」

「人形つかいといわれる人がいて、ものによっては、三人がか  
りで一つの人形を動かすんだ。からだ全体と右手を受け持つ

人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしている  
んだが、まゆ毛も、目も、口も動くし、ときには、したをだ  
したり鼻がてんぐのようにとびだすこともある。人形はもの  
をいわないが、そのかわり説明がついている。ほら、分家の  
おじいさんの大すきなじょうりき。あれにあわせてしばい  
をするんだ。」

「おもしろいでしょね。」

「そりや、おもしろいさ。人間のしばいどちがつて、みている  
と別世界にいったような楽しい気がするよ。」

「文楽のほかにもまだあるんですか。」

「あるとも。いまいった文楽は手でつかうのだが、そのほか、  
指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、



いろいろ種類がある。あやつりは文楽よりもっと古くからあつたし、おじさんの子どものころ、よくみたものだよ。あのこ



ろはかけ絵もあったよ。

「かけ絵ってやつぱり人形のしはいですか。」  
「日本ではあまりさかんでなかったが、アジアでもヨーロッパでも、りっぱなかけ絵しはいができています。ジャワのものはとくに有名だね。牛皮を切りぬいて、美しい色がつけてある。これに光をあててかけ絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでてくる。それが音楽や歌にあわせてしはいをするわけだ。」



「人形しはいって、いろんな国にいろんなものがあるんですね。」  
「だいたい人間には、顔の色やくらしかたがどんなにちがっていても、心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする気持がある。だから、人間がいるところには、かならずしもあれば、絵もある。音楽もある。命のない人形を思うままに動かして、喜びや、悲しみや、伝説や、歴史やを美しくぶたいにあらわそうとする望みもあるのだ。」

「でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしょう。」

「便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてくるのだ。たとえば、わざわざ絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、写真のほうがずっ



と便利べんりなわけだけれど、絵には絵のいいところがあるからね。  
ところで人形しはいだが、これは人間にできないことでも平  
気でやれる。空をとんだり、すがたを消したり。それに、又  
間みたいに不平ふへいやわがままをいわないからね。」

「そりゃ、そうですわね。」

「そのうえ、手がるでおもしろいし、自分で作って自分で動か  
すのは楽しいものだよ、こうえんでも、教室でも、どこでも  
やれるからね。きみもひとつ、作ってみるといいよ。」

「できるかしら。」

「できるとも。かんたんな人形の作りかたを教えてあげよう。  
お友だちとやってみよう。」

### 一 雄の手帳から

#### 一 指人形の作りかた

##### 1 材料。

古はがき一まい。古新聞二まい。日本紙のり。  
絵のぐ。いたぎれ。古ぎれ。

##### 2 顔の作りかた。

(1) 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを  
作り、のりでとめる。

(2) 古新聞を二まいとも八つに切って、そのうち一まいだ  
けを正方形にする。ほかのはよくもんでのばしておく。



(3) 正方形の一まいにのり

をつけてつつにかぶせる。

(4) 首のところだけのこし

て、もんだ紙にのりをつ

けないで、上から上から

かぶせる。

(5) 首のほうからもかぶせ

てまろくしてから、細長

く切った古新聞にのりを

つけてとめる。

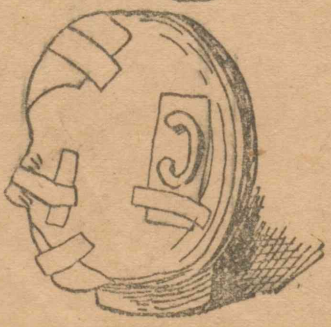
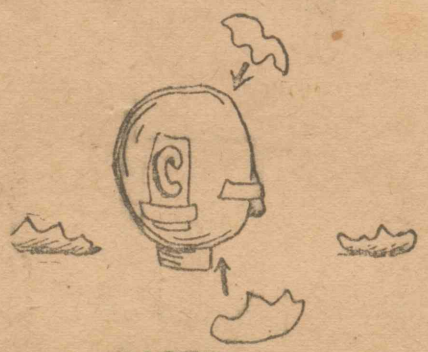
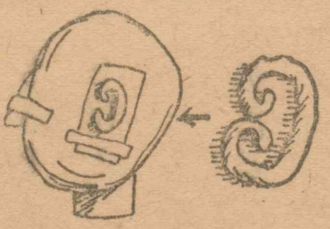
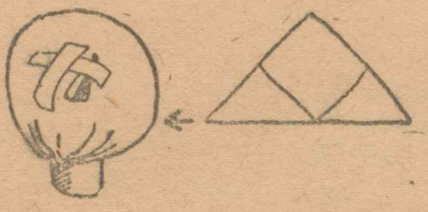
(6) 鼻や耳、ひたいやあご

の形も、古新聞で作って、

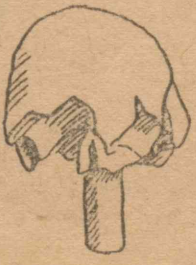
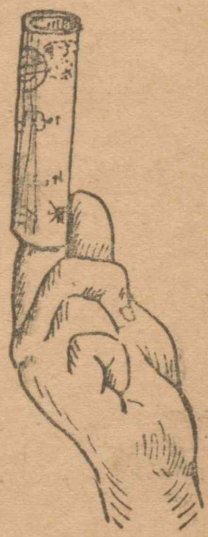
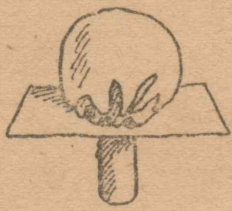
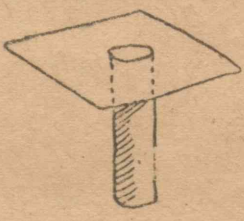
のりでとめる。

(7) 日本紙を細長く切って、一まい一まいによくのりをつ

けてはりかためる。



(8) よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

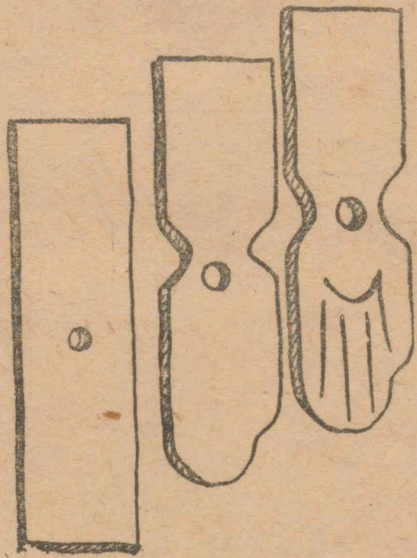




3 手の作りかた。

(1) いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切って、まん中にあなをあける。

(2) あなの両わきを切りこんで、手さきをまるめ、指の線をほる。



4 着物の作りかたと手のつけかた。

(1) 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十センチくらいにつきあわせて、図の形に切る。これを二まい作る。

(2) 二まいあわせて、図の点線のところをぬう。

(3) 顔は、着物のすそからさかさに入れて、首を着物にぬいつける。

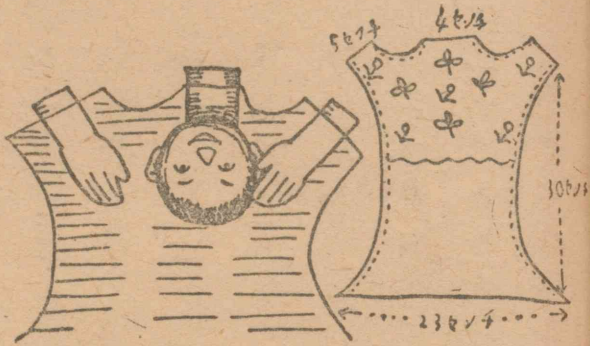
(4) 手は、手さきのほうをいれて、あなに糸を通してぬいつける。

(5) 顔と手をつけた着物をうら返すことができあがる。

二 人形のつかいかた

1 ひとさし指を首の中に入れ、おや指となか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。

2 人形だけをぶたいへだして、つかう人の顔や頭がみえない





ようにする。

3 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

三 ぶたいの作りかた

1 つくえやいす

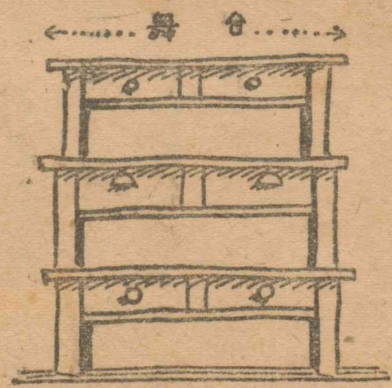
を重ねて、つか

う人のかくれる

ところを作り、

まくでかくす。

2 ぶたいの上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。



### 六 伝説

先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、なんともいえないあたたかい感じのするものである。なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。子どもどものときからききなれた伝説が、そのあいだにこまれていくからである。伝説には、歴史にもとづいたものもあるが、むかしからいい伝えられたというだけのものほうが多い。また、文章に書きつづられて有名になったものもあるが、ただ人々のあいだで語り伝えられていくだけで、そういう人たちのなくなるにつれて、順々に消えていってしまうものもある。



それで、おじいさんやおばあさんからきいた話を思いだして、書きのこしておくということは、ただおもしろみがあるばかりでなく、どうといことである。

伝説を広く全国で調べてみると、よく似たようなのが、あちらこちらで発見される。その中には、世界に共通なものさえある。次にいくつかの例をあげてみよう。

### みそ五郎

むかし、島原にみそ五郎という大きな男がいた。みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、ひなたぼっこをしながら、まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったとき、のくわのあとで、そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島であるという。

### 九十九の石だん

秋田県の男鹿半島に、神山、本山という二つの山がある。どちらもけっしてたやすくは登れないが、ふしぎなことに、神山のほうには、むかしから九十九だんの石だんができている。すばらしい大きな石だんで、とても人間わざではない。

むかし、神山におにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑をあらすので、村の人たちはこまりはて、おにに向かって、一つのなん題をもちだした。それは、おにが一夜のうちに百だんの石だんをきずきあげること、もしそれができなかつたら、



これからのちは、けっして村へでてきてはならない、もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであった。

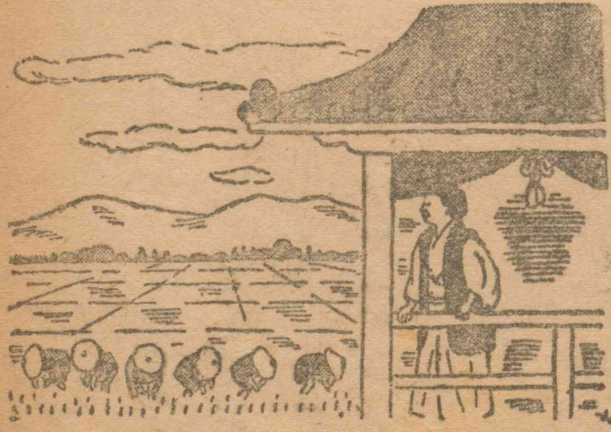
おには、これを承知して、ある夜、石だんをきずきだした。なにしろ、いっしょうけんめいであるから、みるみるうちに工事がはかどって、九十九の石だんができあがった。ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明かるくなった。おにはおどろいてすがたを消してしまった。おには約そくをまもって、そののちはもう田畑をあらすよう



なことはなくなりました。

### 湖山の池

鳥取の西方約四キロのところ、まわり十二キロの湖がある。これが湖山の池である。むかし、この里に長者がいた。一代二代はいい人で、よくさかえたが、三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけて、わがままをしはじめた。ある年の夏、きょうは長者の家の田植えだというので、里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まっ





てきた。

長者は、なんと思っただか、なん千アールの田をきよう一日で植えてしまえといいつけた。里の人たちはおどろいたが、いいだしたことはあとへひかないので、おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、一心にはたらいした。長者は、高どのの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。

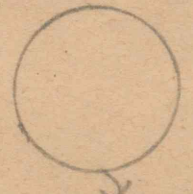


ところで、もうあとわずかといふところで、日ははや西の山にかたむいて、くれそうになってきた。このとき、高どのに立っていた長者は、日のおおぎをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどまでもどって来た。それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の

望みはどげられた。

ところが、そのあくる朝ながめると、高どののは消えてしまつてあとかたもなく、きのう植えたなん千アールのあの美しい田さえなく、みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となつていた。

家具の岩屋



徳島県の津峯山に、家具の岩屋というのがある。むかし、あつるまじしい人が、ふとしたことから、ここからぜんやわんなどの家具のでることを知った。それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口でたのんだ。そうしてよく日いつてみると、たのんだ品物がちゃんとそろってならんでいた。



そのことが評判になって、だれもかれもかりにいくようになつた。その中にわるい人がいて、かりた家具をかりっぱなしにして返さなかつた。

そののちは、だれがなんとたのんでも、かしてくれなくなつたという。

### 十和田湖

十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。名を八郎といった。ある日のこと、八郎が山でしごとをしていると、のどがかわいてきた。

水を飲もうと思つて小川の岸にでてみると、美しい小魚がおよいでいる。八郎はその魚をとつてやいてたべた。

小魚はしおからかつたので、のどがかわいてたまらない。そこでまた川の水を飲んだ。いくら飲んでものどのかわきがとまらなかつた。

そのうちにからだがだんだん長くのびて、おしまいにへびになつてしまった。

家にはひとりの母がある。母にそのからだをみせるにはしのびない。また人にみられるのもこまる。

八郎は思い切つて、水ぞこにとびこむと、小川がひろがつて、みるみるうちに湖となつた。それが十和田湖のおこりだということである。

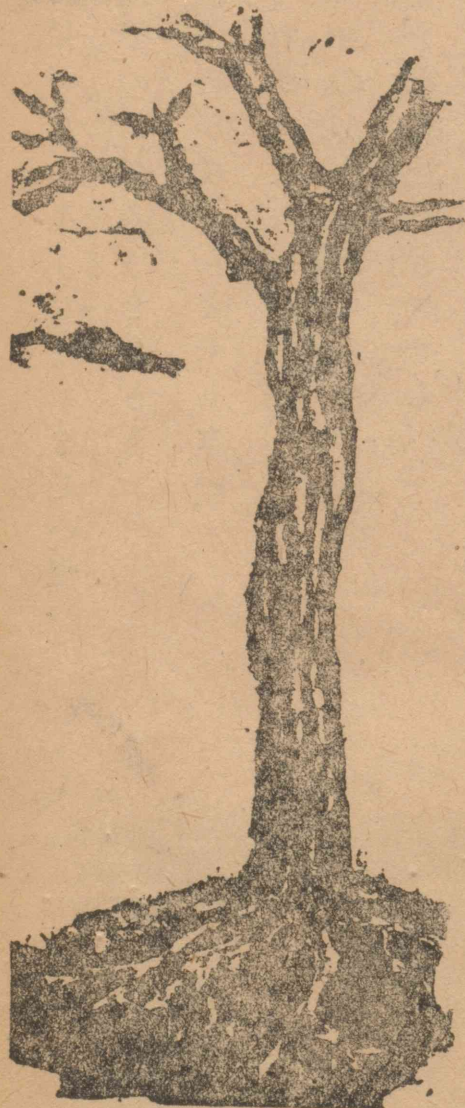
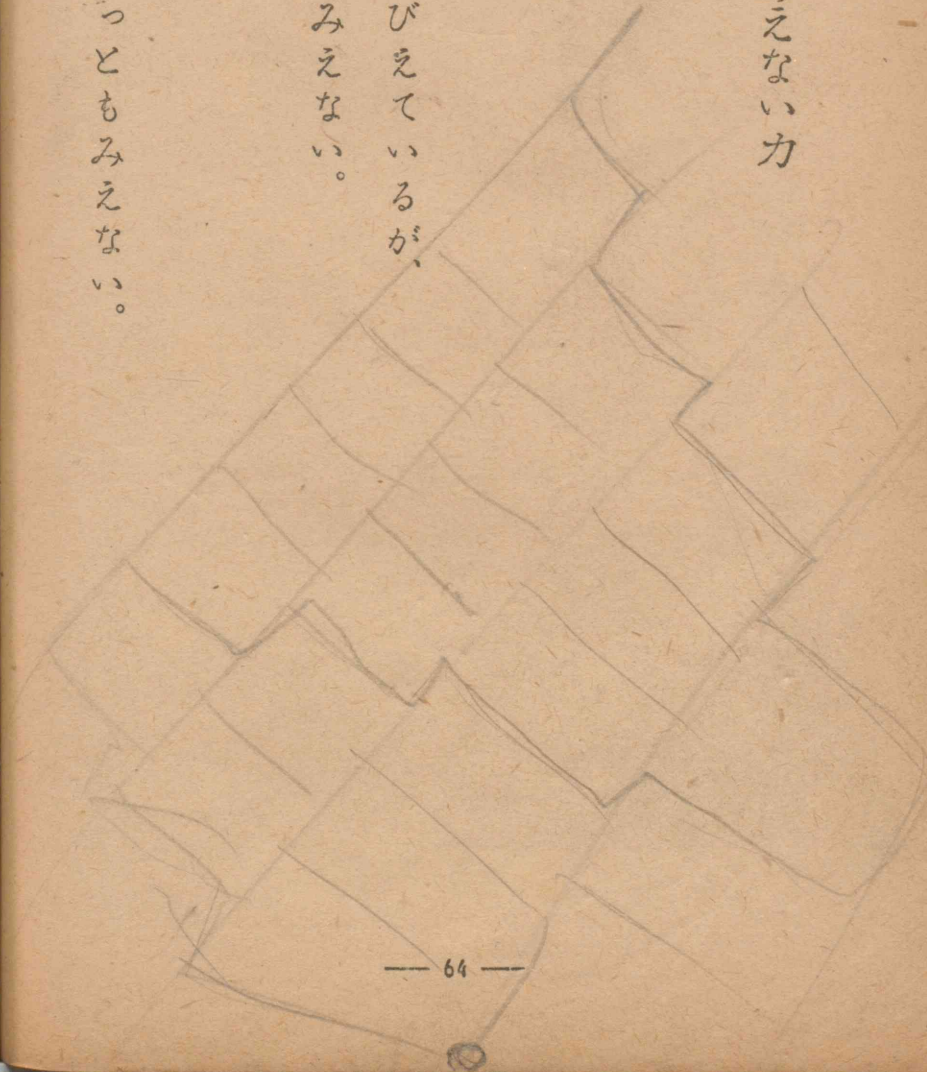




七 みえない力

根

葉は青く、  
くきは長く、  
みきは高くそびえているが、  
根はちつともみえない。  
花は美しく、  
実はうまい。  
しかし根はちつともみえない。



根のさきは毛より細い、  
毛よりもやわらかだ。  
その細いやわらかなものが、  
地をうがち岩をおしわけ、  
深く広くのびていく。  
のびていく根のさきをさえぎるものはなにもない。



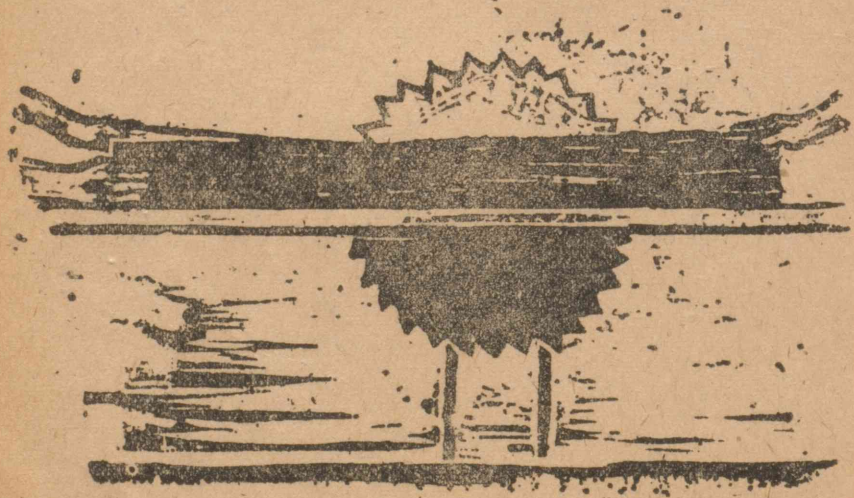
おおづなのようなたくましい根が、  
深くのびてみきをささえ、  
広くのびてえだをやしない、  
それからた<sup>ほそ</sup>細い根が、  
つなのようにからみあつて、  
葉を育て花をさかせる。

根はみえない。  
みえないが深くて長い。  
深くて長い根の上に、  
みごどな草や木がしげつていく。

のこぎり

のこぎりには、はがある。  
のこぎりのはは、  
いぬの歯のようにどがつて、  
一つおきに右と左にすこしよじれて、  
二十も三十も続いてる。  
五十も六十も続いてる。

のこぎりのはは、  
いつもやすりをかけて  
右と左によじっておかないと、





なんの役にもたたない。

のこぎりは、

あつみをもっている。

大きなかたい物を切るのこぎりはは、大きくてあつい。

小さなやわらかい物を切るのこぎりはは、小さくてうすい。

糸のこは糸のように細く、

ひきまわしはひじょうにせまい。

まっすぐに長く切るのこぎりは、広いはばをもっている。

こびきの大のこははばが広いし、

製材所せいざいじょのまるいまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

はたらきのある人は、

はをもったのこぎりになている。

しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、

じき、役にたたなくなる。

どんなにはたらきがあっても、

それにあつみと

広さがなかったら、

正しくりっぱに世の中をわたることができない。



ハ 雪まろげ

深川ふかがわの芭蕉ばしやうの家の近くに、曾良そらという人が住んでいました。

曾良は、信州しんしゆの人で、歌がたいそうじょうずでしたが、芭蕉ばしやうのことをきいてから、その弟子でしになりました。そうして、はい句くを勉強べんきやうすることに心をきめました。

曾良は思いました。芭蕉ばしやうはたったひとりて住んでいて、なにかにつけて不自由ふじゆうであろうから、いろいろお手伝おてんいをしてあげたい。下男げなんのように住みこんであげてもいいけれども、芭蕉ばしやうはひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、自分は、その近所きんじよに別に家いへをかりて住むことにしました。

そうして、毎朝早くきては、芭蕉ばしやうのおきないうちに、いどころ水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。また、まきが少ないと、近所へ木をひろいに行ったりしました。このようにして芭蕉ばしやうにつかえながら、はい句くの話わをきくのでした。先生の近くにいればこそ、毎日教おえてもらえるので、これがなによりうれしいと、曾良は喜びました。

そのうちに、冬ふゆがきて、くもった空そらがひくくたれる日ひが続つきました。芭蕉ばしやうはからだがよわいので、寒ふさは身にこたえました。が、雪ゆきをみるのが楽しみでした。芭蕉ばしやうは、くもった空そらをおおきながら、雪ゆきが早くふるといいなあと待ち遠まちしがっていました。そのあたりに遊あそんでいる子どもたちも、同じ気持き持もてました。また、なにもふってきもしないのに、



「雪やこんこん、あられやこん  
こん。」

などと、はやしたてていました。

芭蕉は、子どもが大すきでした。そのあたりにいるのは、川べりにある船大工の子どもや、のりをとりにでるりょうしの子どもたちで、どれも身なりはきれいではないのですが、芭蕉はいつも遊び友だちにしています。

「みんなは、雪がふったら、な

にをして遊ぶの。」

「雪だるまを作るの。」

「じゃあ、おじさんも手伝ってあげよう。」

話をしているうちに、バラバラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落ちて、はね返ったりころがったりします。

「やあ、あられだ、あられだ。」

子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしませんが、あられはその手にはのらないで、顔にあたりたりふところにとびこんだりします。芭蕉は、にっこりわらって立っていませんが、子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにかけたしたいと思いました。





いざ子ども走りあるかた  
まあられ

芭蕉の待ちに待った雪が、

どうとうくれがたからふって  
きました。みるみるうちにつ  
もりましたが、曾良が水をた  
くさんくんでおいてくれたし、  
まきもたくさんどってきてく  
れてあるし、そのうえ、台所  
の米入れの大きな入れ物もか  
なり重いので、二三日はこま  
ることもありません。



ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸をゆきぶったり、大  
川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのでしたが、そ  
の夜は、すべての音も雪にうずめられたようになしずかでした。  
そのしいんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の匂  
を考えました。

トントン、トントンと入口をたたく者があります。

「先生、もうおやすみですか。」

その声は、毎日ききなれてゐる曾良の声です。芭蕉はすぐ戸  
をあけました。

「こんなにふるのによくきたな。」

「先生は、おひとりですらどうしていられるかと思うと、どうして  
もこずにはいられませんでした。」



「友だちがほしくなるのはやはりこんなばんだ。まあ、火をたきつけておくれ。」

やがていりりには、パチパチとしばがもえあがります。

「先生、今夜の雪の匂はいかがですか。」

「匂か、まだできない。だが、みせるものがあるよ。」

芭蕉は、

えんがわにいつてなにか持ちだしてきました。それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこしらえたうさぎでした。

なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。

曾良は、芭蕉の子どもらしい手すさびがすっかりうれしくな

りました。ふたりは子どものようにわらいました。

きみ火をたけよきものみせん雪まろげ

そのやうな

九 テニス

少年

はかしたて  
しかなり  
てすさびした

メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、いよいよ試合をする日のことでした。テニスコートには日本とメキシコの国旗が美しくひるがえって、きょうの戦いを物語っています。スタンドには、はじまるまえからたいへんな見物人でした。時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにきました。すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどってくると、中国人らしい十一二の兄弟にサインをたのまれました。



その少年たちは、じょうずにえい語をつかっていたのみました。私は、その少年の持っていたペンをかりて、サインをしてやりました。

少年たちは、これを見て、うれしそうに、えい語で、

「きょうは、きつと勝ってください。」

といました。

私は、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。あまりかわいい少年だったので、よくみていますと、どこかしら日本人らしいところもあるので、

「きみたちは日本人ですか。」

とたずねました。ふたりの少年は、にっこりとわらって、  
「そうです。」

とはっきり答えました。

「そうだったのかい。きみたち

は、日本語を知っているの。」

「いいえ。」

「どこで生まれたの。」

「セントルイスで。」

「日本へいきたくない。」

「いきたくありません。」

「どうして。」

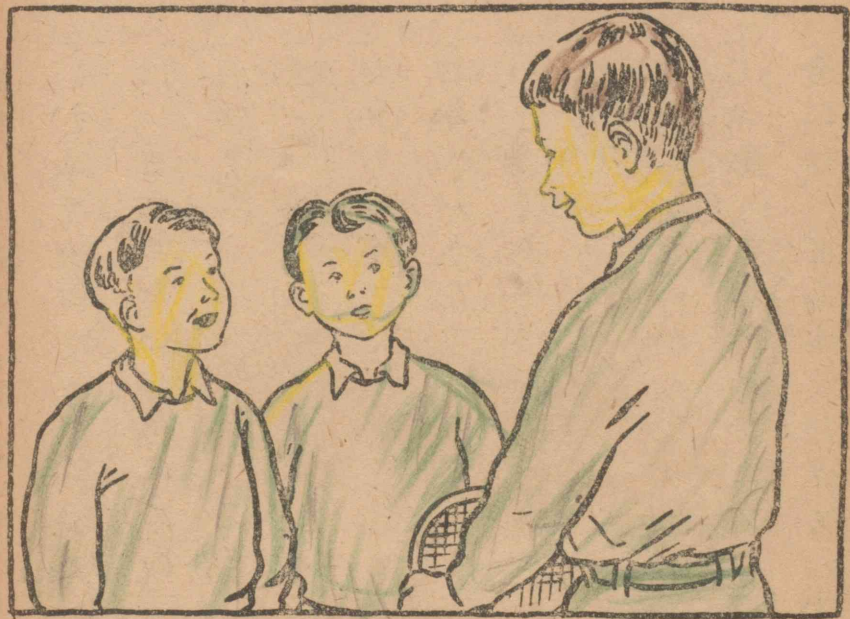
「友だちがないから。」

「じゃあ、きょうのテニスの試

合には、どちらをおうえんす







るの。キンゼー選手はセント  
ルイス生まれだよ。  
こう、私がたたみかけるよう  
にたずねたとき、少年たちは、  
「オフ コース、フォア」  
「パン。サー。」  
「いうまでもなく、日本ですよ。」  
と、ことに「ジャパン」ということ  
ばに力をいれて答えました。そ  
のひとみの中には、「なぜ、そん  
なことをきくのか。」という色が  
あらわれていました。

日本という国をみたこともなく、また日本語をすこしも話せ  
ないこの二少年が、遠い母国の選手のために、勝つことをい  
つてくれていることを知って、むねがいっぱいになりました。  
それからまもなく試合がはじまりました。キンゼー選手は世  
界的名手ですが、私もどうしても勝たなければならぬ  
と思いました。

火のでるようなはげしい試合が続きました。三時間もぶつと  
おしに戦いました。なんどもコートでたおれました。たおれて  
はおき、おきては戦いました。私はスタンドから一心におうえ  
んしている二少年のことを思っでは、ふるいたって戦い、どう  
とう五セットで勝つことができました。私はいまでも、あのと  
きのことをわすれることができません。



やわらかなボール

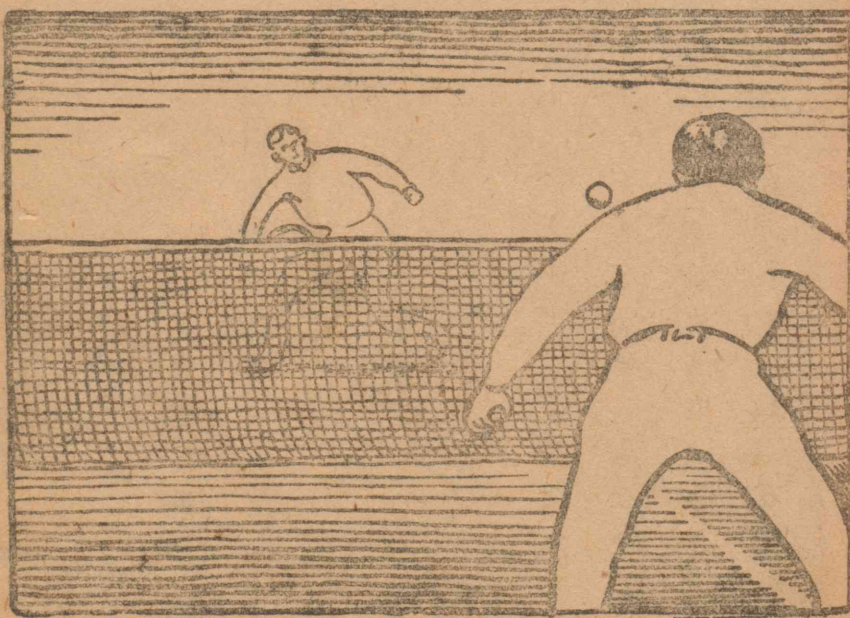
五月、六月、七月、八月の四か月にわたって、十一か国のテニス選手をなぎたおした清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。もし、この決勝戦に勝つことができたら、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらふことになります。

清水選手の相手はチルデン選手でした。チルデン選手は、アメリカきっての名手です。身長は一・八七メートル、みるからにりっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶどころではありません。それでも、この清水選手の試合を見物しようと、方々の国の人々が、そのコートを目がけて集まりました。

まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそそいでいました。そこへ両選手があらわれました。スタンドの人たちは、われるようなはく手をふたりに送りました。

「プレー」。

試合がはじまりました。目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききしました。ボールはたましいのこもった生きものようになって、は





ねどびました。一つのボールを中心にして、両選手はどぶ鳥のようにかけまわりました。

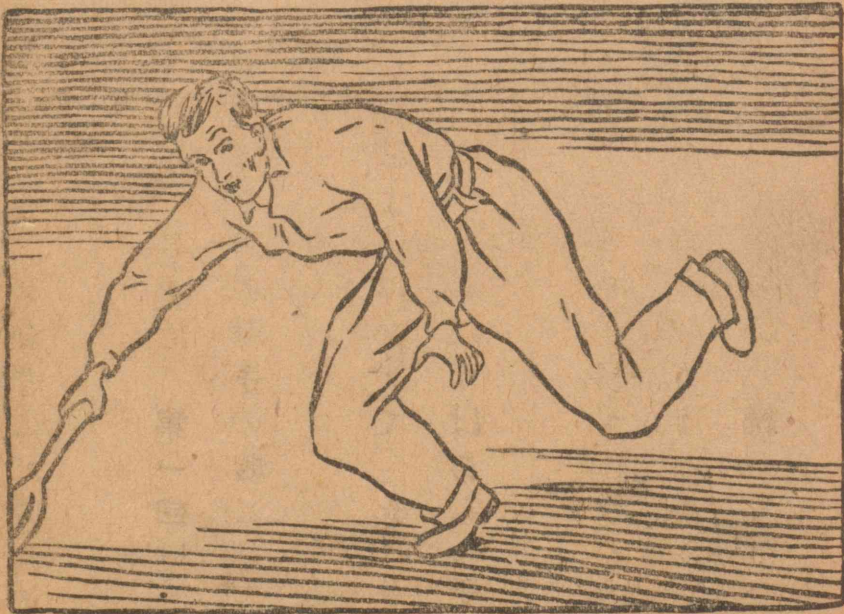
かたずをのんで試合をみているうちに、早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、第二回めもやはり清水選手の勝となりました。

あの小さなからだが、まほうつかいのようになって、大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、ことばではあらわすことができません。

しかし、さすがにチルデン選手です。このままおされるものではないとせん。もう然ぜんとたちなおって、電光でんくわうのようなボールをうちだしました。第三回めはチルデン選手の勝、続いて第四回めもチルデン選手の勝となりました。

見物人は、いよいよ手にあせをにぎりました。ところが、試合のまっさいちゆう、どうしたはずみか、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。そうして、いまにもころびそうになりました。

**ア**相手を一きよにうちのめすぜつこのチャンスです。チルデン選手もそのおうえん者たちも、もうあきらめているときでした。清水選手は、ボールをやわからか





くして、しかも受けやすいところに、送ってやったのであります。チルデン選手は、とりみだしたしせいではありましたが、やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができ、試合はふたたびはげしいものになっていきました。つぎつぎと、両選手はしのぎをけずって戦いました。夕日はすっかりおちてしまいました。

わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。ネットをはさんで、両選手はかたいあく手をかわしました。心おきなく戦いぬいた両選手のために、見物人たちは、しばらく、あらしのようなはく手をおしみませんでした。

## 十 ことばのはたらき

### (一)

父が、

「水を持っておいで。」

という。

庭で植え木の手入れをしている父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱい持っていくだろうか。

手紙を書こうとして、すずりばをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろうか。

ふろ場の中で湯をかきまわしている父にこういわれたら、手



おけに水をいっぱい飲んで持っていくだろう。

ことばは、そのときのまわりのようすや、ゆきがかりや、音声や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

「水を持っておいで。」という

かんたんなことばでも、相手の人のいうことばのわけをよくききわけて、それによくかなうようにしなくてはならない。もし、そのわけにかなわないことをすれば、たいへんおかしなことになるばかりでなく、そのことばがわかったとはいえないことになる。

話をきくときには、相手の人のいつていることばをよくきき



わけ、のみこまなければならぬ。そうでないと、相手の人に満足をあたえることができないし、また自分の誠意も通じない。自分が話をするときには、その場のようすによくあうように、気をつけて話さなければならぬ。

ごくかんたんな「ありがとう」というあいさつにしても、ほんとうに感謝の心持をこめていうのと、ただとおり一ぺんのあいさつとしていうのとでは、いいかたもかわってくるであろう。食事のたびごとにいう「いただきます」「ごちそうさま」にしても、そのときそのときの心持があらわれるはずである。そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。それは自分の生活を軽はくにし、相手の人をいやしめることにもなるから



である。

どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのよ  
うになえていたのでは、そのことばは、すこしの方も発きし  
ないからねんぶつである。

話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面かげと  
いうこともできよう。

(二)

「くりひろいにいった。」

太郎が、こういう短い文を書いた。

太郎はこの「くりひろい」の中に、さまざまな気持ちをこめている  
にちがいない。天気よかったこと、山へいったこと、弟やい

ぬをつれていったこと、くりが

たくさん落ちていたこと、カサ

カサと落ち葉をふんでいたこ

と、小鳥が鳴いていたこと、帰っ

ておかあさんにゆでていただ

たこと、みんなでたべたこと

——楽しかったさまざまなこと

こまかに、この文の中にたたみ

こまれてにちがいない。

秋子も同じように、「くりひろ

い」にいった。」と書いた。太郎と

同じ文であるが、その中にたた





みこまれてゐることは、太郎とはちがっている。となりの友だちにさそわれていったこと、くりはあんがい少なかったこと、そのかわりきのこがたふさんあったこと、りすをみつけて追いかけたこと、もみじのえだをとってきたこと——そんなことがふくまれている。

ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、そのなかみは、おそらく、太郎や秋子と同じではなからう。それは、めいめいの生活や経験が同じでないためである。

みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがってくるのも、やはりこのためである。

しかし、たたまみこまれてゐるなかみはそれぞれちがっても、「くりひろい」にいった。と、い、い、「遠足」ということばは、だれにで

も同じようにわかり、同じように通じる力をもっている。そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

書くことは、話すこととちがって、その場のようすが相手にみえないから、ことばづかひやいいあらわしかたには、いっそう気をつけなくてはならない。前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。文をなおすことはつまり心を練ることになる。心を練るほど、ことばがみがかれてくる。



「赤とんぼがとんでいる」

「赤とんぼ」という文字をとおして、すいすいとびまわるかわい  
い赤とんぼを、心の中にえがきだす。「とんでいる」で動いて  
いるようすがすぐわかる。

「赤とんぼ」が「とんでいる」。このようにまとまると、だれ  
でも読んで、すぐにそのわけがわかる。それは文字のおかげで  
ある。ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがった  
ものが思いだされてくる。太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむ  
れてとんでいる景色を思い、すすきの野原を心にえがき、自分  
もそんなところにいって遊んでみたいと思う。

正男は、きよ年のいまごろのことをふと思いだす。弟にせが  
まれて、赤とんぼをとりにてかけたが、道ばたに野はぎがさい  
ていたので、赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱいつんで帰っ  
たことを思う。

秋子は、おと年、この学校にうつっ  
てきたときのことを思いだす。だれも  
話し相手がなないので、しょんぼりと校  
庭に立っていると、赤とんぼが自分の  
まわりをとんでいた。

「赤とんぼがとんでいる」。こんな短い  
文であるが、読み手によって、三人三  
よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。いった  
ん読まれてしまうと、読み手の思いでや心持にとかされて、そ  
の人その人の生活や経験によって生かされてくる。





十一 ある写真帳

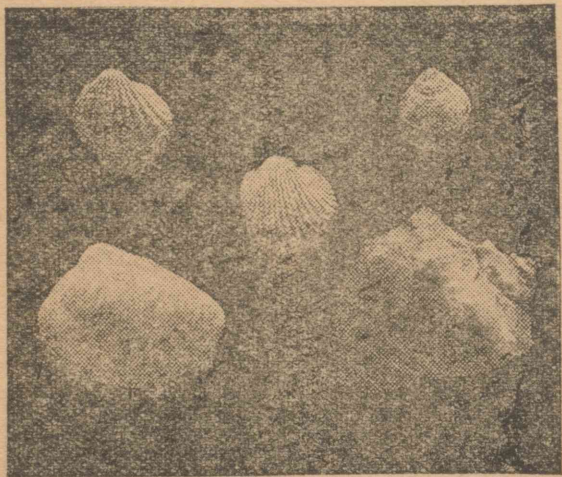
はじめのことば

あなたがたの家に、写真帳があるでしょう。  
それにはあなたがたのおとうさんや、おじいさんや、ひいお  
じいさんの写真がでていたり、あなたがたの小さいときの写真  
などもあるでしょう。

その写真帳をひろげてみると、あなたがたの家のむかしから  
のことがさまざまに思いだされるでしょう。なつかしいことや、  
楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。

次の写真帳は、なんの写真帳でしょうか。  
これを見て、どんなことを感じるでしょう。

貝づか



ここに貝がらがあります。みたど  
ころ、なんのかわりもない貝ですが、  
いまから三四千年もまえの貝です。  
四年生のとき習った貝づかのことを  
思いだしてください。

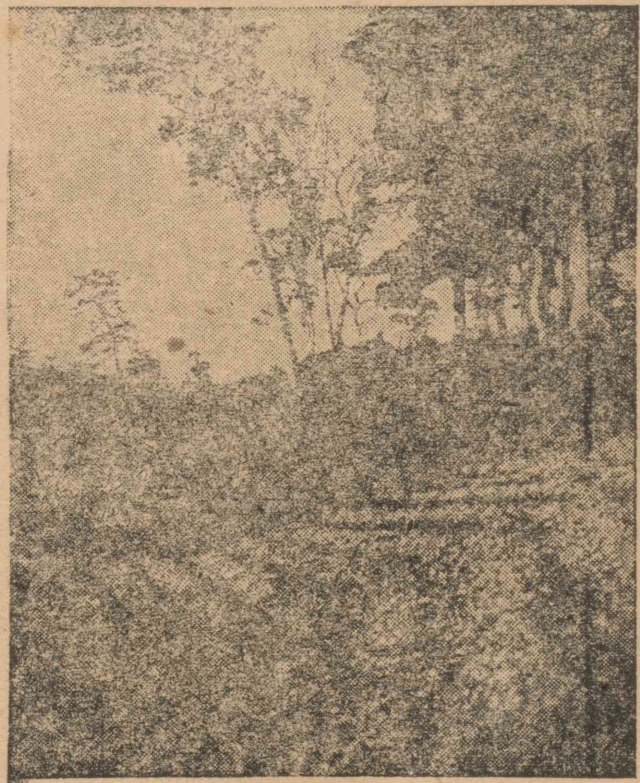
貝づかからでる貝は、三百種類に  
ものぼりますが、古代の人は、はい  
がい、はまぐり、かき、しじみ、あ



かにしなどをたく  
 さんたべていたよ  
 うです。このほか、  
 魚では、たい、さ  
 ば、まぐろ、かつ  
 おなどをたべまし  
 た。

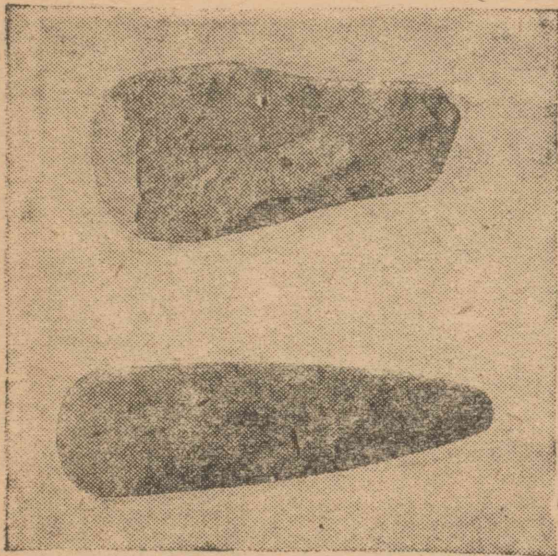
このように、古  
 い時代のことがはっ

きりわかるいとぐちとなったのは、アメリカのモールズとい  
 う学者が、東京の<sup>とうきやう</sup>大森の<sup>おおもり</sup>貝づかを発見してからのことでありま  
 す。

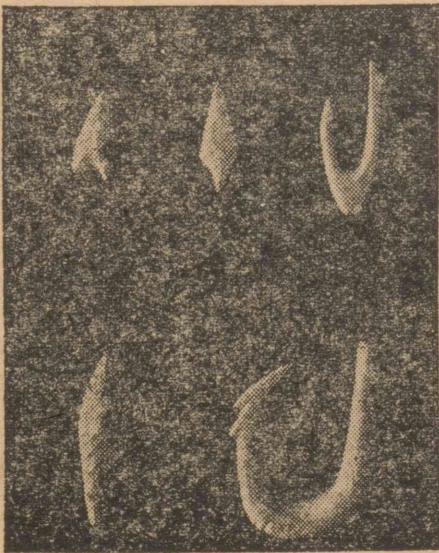


石器と土器

貝づかからでたものをならべてみ  
 ましょう。石のやの根があります。



石のお  
 のもあ  
 ります。  
 しかの



角などで作ったつりばりもあります。  
 また、土器もあります。これは、  
 食物をいれるためのものですが、  
 もちろん、水をくんだり運んだり





するときにもつかったことでしょう。  
土器には、なわ目のもようがあるの  
で、じょうもん式土器といえます。形  
も、かめや、はちや、いろいろのもの  
があります。

じょうもん

式土器のほか  
に、やよい式

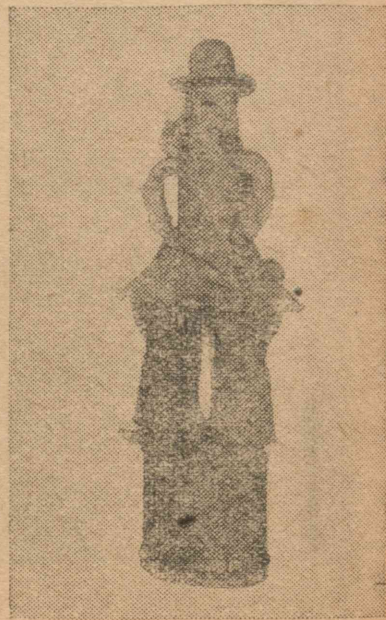
土器といひのがあります。それは、も  
ようもごくかんたんで、形もたいへん  
よくまとまっています。この式の土器  
は、はじめ、東京のやよい町から発見



されたので、やよい式土器とい  
う名まえがつけられています。

は  
に  
わ

この人形は、はにわといって、  
古代人のはかからほりだされた



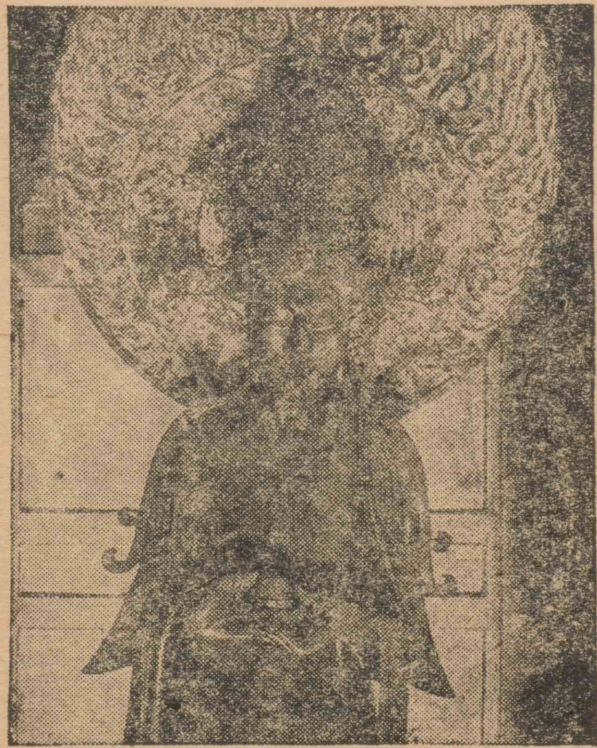
ものです。赤色のすやきの土人  
形で、高さは一メートルほどあ  
り、男や女のいろいろなすがた  
をあらわしています。手首やむ  
ねなどには、まがたま、まるた  
まなどがかぎってあります。こ



のやさしいのびのびした顔をごらん下さい。これを見ても、平和を愛した古代の人たちの気持がよくわかるではありませんか。はにわには、このほか、うまや、いぬや、鳥などをこしらえたものがあります。

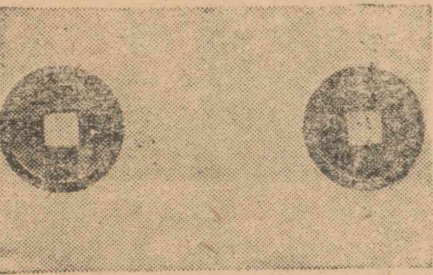
### 夢殿ゆめどのの観音

この美しい、りっぱなほとけさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。



夢殿の観音とって、いまでも、多くの人々からたつとばれてゐる作品です。

### はじめてのお金



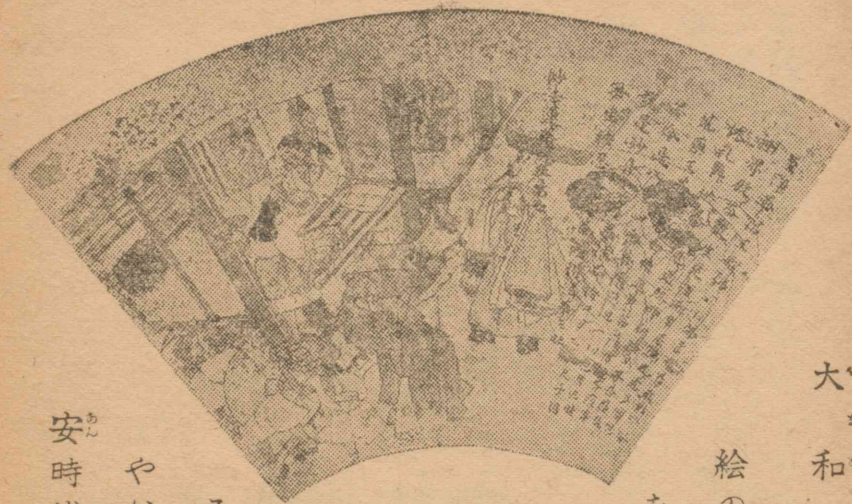
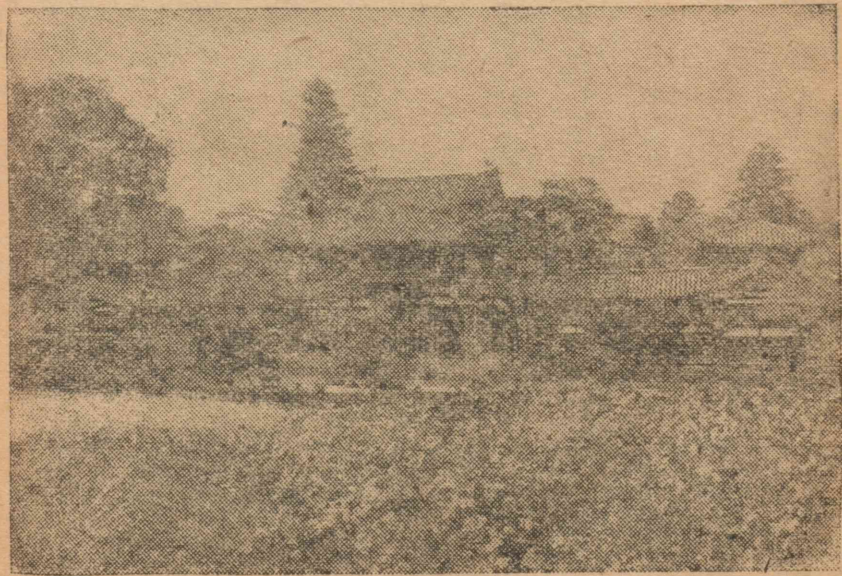
これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。いまつかっているお金とずいぶんちがいます。四角なあながあいたり、クロスワーズパズルのようにならんだ文字があったりして、おもしろいお金です。お金がなかったときにくらべて、お金ができてからはどれほど便利になったか、考えることができますか。



ほうおう堂

これは、九百年ほどまえに作られた平等院ひょうどういんという建物の中にある名高いほうおう堂です。

ほうおう堂という名まえは、屋根のかざりにほうおうがついてい  
るからだといわれていますが、屋根の形や左右にのびたろうかのかつ  
こうにも、ほうおうという鳥の美  
しいすがたがあらわれていること  
に気がつくことでしょう。



大和絵

絵の中ほどをごろんなさい。大きなげた  
をはいた女の人がおともをふたりつ  
れていきます。この人たちの着物やか  
ぶりものなども、いまのものどずい  
ぶんちがっています。

向こうがわに店がみえます。皮ざ  
いくの店らしく、なにかの毛皮がひ  
ろげてあります。くだものをならべた  
やお屋らしいものもあります。これは、平  
安時代の町の風景で、大和絵でやわらかに



かきあらわされていきます。

絵まき物

四つに組んだ大ずもう。かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。うさぎはけんめいにこらえましたが、たおれそうです。たまりかねた二ひきのうさぎが、うしろから手をふり足をふって、おうえんをはじめました。  
土ひょうは、はぎやすすぎが



さきみだれた秋の野原。これは、鳥羽僧正とてはそうじょうという人がかいた動物絵まきの一場面であります。平安時代の終りから鎌倉時代かまくらにかけての芸術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

さあ、うさぎが勝つでしょうが、かえるが勝つでしょうか。

仁王におうさま

こんどは仁王さま。  
大きな目、のびた手  
さき、しっかりふま  
えた両足、どこをみ  
ても、力があふれて  
います。







とも鎌倉時代の作で、ほりものとして代表的なものです。

能面

仁王さまは寺の門に立って、ほとけさまをおまもりします。上の仁王さまをほったのは運慶うしきだといわれています。ふたつ

これは能につかうお面です。

もう人の歩きかたや、身ぶりや、手ぶりによって、このお面は、生きものののように、いろいろな表情をあらわします。室町むろまち

時代の芸術品です。

イソツブ物語



三年生のときに習ったイソツブ物語。イソツブ物語はイソツブという人が書いた

たお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に伝えたのは、三百五十年ほどまえのことです。

いんさつ機も外国からわたってきていましたから、こんなりっぱな本ができました。日本のことばになおしてローマ字で書いてあります。

ESOPONO  
FABVLAS.  
Latinuo vaxite Nippon no  
cuchito nasu mono nari.

IEVS NO COMPANHIANO  
Colégio Amaculim vobis. Superiores no gemen  
quocumque coram Iam. quibus mono nari  
Gmxxxxx yon. M. D. L. XXXXIII.

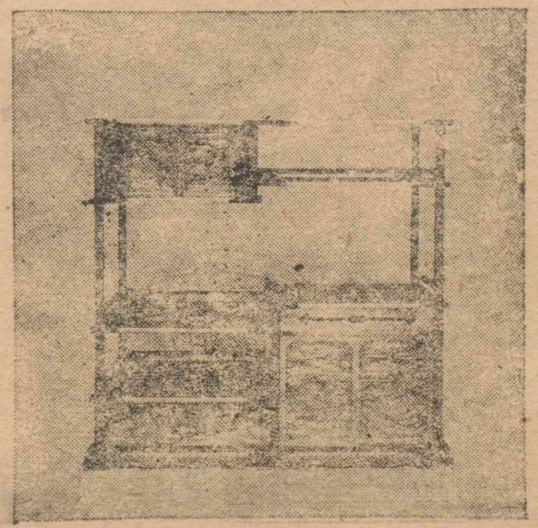


外国から書物が新しくはいつてくることは、外国人の心が伝わることで、日本はこのような心をとり入れて、どんどん育つてきました。

まき絵書だな

これは、茶だんすににていますが、そうではありません。江戸時代にできたまき絵書だなです。

まき絵といふのは、うるしをぬつたうえに、金や銀のこなをまいて、もようをあらわしたものです。また、なまりや貝などはめこんだものもあります。黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえない

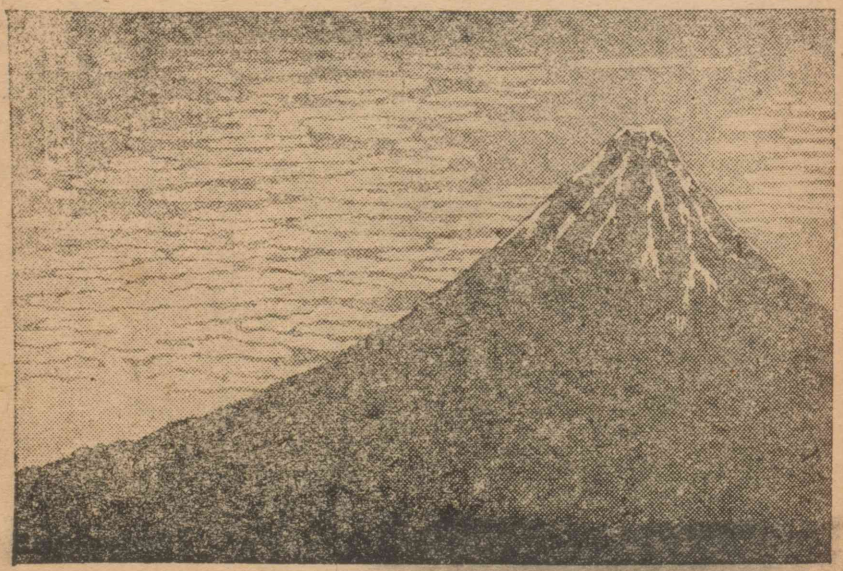


い美しきです。

まき絵は、日本のすぐれた工芸品の一つで、古くから外国人にもてはやされてきました。

浮世絵

おなじみの富士山の絵です。この絵は北斎という江戸時代の人のかいたもので、浮世絵といえます。この浮世絵は、版画で、絵をかき人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作





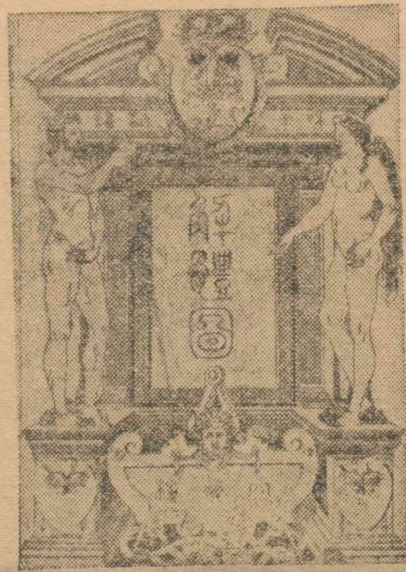
品なのです。三人がひとつに心をあわせた美しさは、このとおりりりっぱなものとなって生まれたのです。

### 解体図

これは、オランダのターヘルアナトミアという人体のことを絵いりで説明した本を、いまから百八十年まえに、日本で出版したものです。

表紙の文字は、「かいたいず」

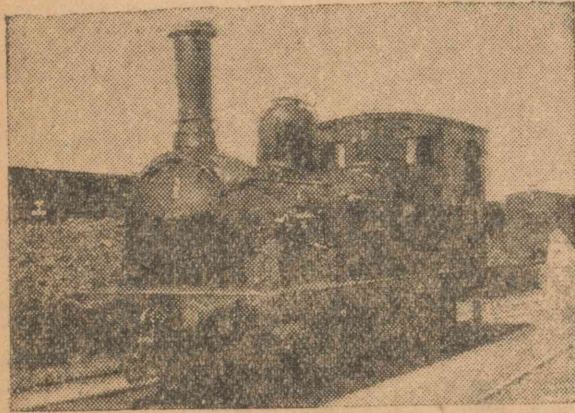
と読みます。そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、この本によって、日本



の医学は、はじめてすっかりしたものとなりました。この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。新しい学問をきり開いていくときは、いつの時代でもなみなみのどりよくでなしとげられるものではありません。

### 汽車第一号

なんとかわいい汽車ではありませんか。これは、汽車第一号で、明治五年九月十二日、はじめて日本で東京横浜間を走ったものであります。汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。そうして、遠い日



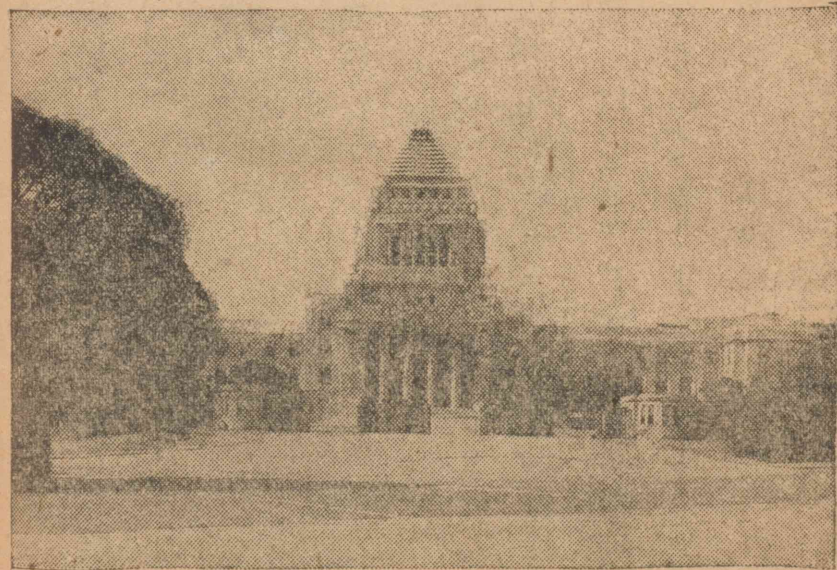


ころも近くなり、世界はだんだん小さくなるような気がします。

### 議事堂

みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。平和な国日本を作るために、また、文化国家をきずくために。

こんどの新しい憲法は、この議事堂でたんじょうしました。



### おしまいのことば

これで、日本の面かけを写した写真帳が終わりました。このよ  
うな歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけ  
ばいいでしょうか。

それは、民主主義ということばをほんとうに生かしていくよ  
りほかに道はありません。ことばを生かすということばは、身に  
おこなうということばです。

こうして、みんなの歩調がそろったときに、はじめて、日本  
が正しい、美しい国となることができましょう。



国語 小学校 第五学年用 下

Approved by Ministry of Education

(Date Jan. 25, 1950)

小国 502

昭和二十三年一月二十五日翻刻発行  
 昭和二十五年七月二十四日修正翻刻印刷  
 昭和二十五年八月三日修正翻刻発行  
 (昭和二十五年八月三日 文部省検査済)

定価 金二十一円二十銭

著者 文 部 省

発行者 大阪書籍株式会社  
 代表者 松村九兵衛

印刷者 大阪書籍株式会社工場  
 代表者 松村九兵衛

発行所 大阪書籍株式会社  
 大阪市西成区津守町五九六番地

|         |         |        |        |        |        |
|---------|---------|--------|--------|--------|--------|
| 議 (114) | 選 (77)  | 便 (47) | 績 (42) | 菜 (23) | 祝 (4)  |
| 化 (114) | 旗 (77)  | 祖 (55) | 童 (43) | 覚 (25) | 賀 (4)  |
| 憲 (114) | 誠 (89)  | 順 (55) | 鼻 (45) | 詞 (34) | 路 (10) |
|         | 慣 (89)  | 共 (56) | 牛 (40) | 区 (35) | 軽 (16) |
|         | 堂 (104) | 承 (58) | 詩 (47) | 別 (35) | 散 (19) |
|         | 宣 (109) | 里 (59) | 悲 (47) | 因 (35) | 容 (20) |
|         | 師 (100) | 評 (62) | 伝 (47) | 冷 (36) | 易 (20) |
|         | 版 (111) | 細 (65) | 歴 (47) | 経 (40) | 飲 (23) |
|         | 解 (112) | 句 (71) | 史 (47) | 験 (40) | 義 (23) |





五  
日  
六  
日